

介護総合演習での5つの工夫とその実践 — 初めての介護実習前における学生の不安感の軽減に向けて —

Five Ideas and Practice on Integrated Practice of Care Work

—Towards the anxiety reduction of students in training of care at the first time—

福田 明
Akira FUKUDA

釜土 禮子
Reiko KAMADO

小坂 みづほ
Mizuho KOSAKA

合津 千香
Chika GOZU

要旨

本研究では、初めての实習における学生の不安感の軽減に向けた介護総合演習での教育指針を得るため、①初めての実習1か月前の不安感の内容を把握し、②それに基づいた介護総合演習での5つの介入を紹介し、③その介入結果を評価した。

本学介護福祉学科1年81人を対象に、A調査では初めての実習1か月前、B調査では介入後の実習前日における実習関連20項目についての不安感の度合いを「不安でない」(1点)～「非常に不安」(4点)の4段階で調査した。その上で介入では、過度の不安感が学習意欲だけでなく、自己に対する自信も低下させるとの指摘があることから、A調査で「非常に不安」の割合が高かった項目を中心に介入11項目を選んだ。

介入後のB調査を踏まえ、A調査における「非常に不安」の割合と比較した結果、「実習施設の理解」が19.6%減、「利用者との関係」が17.9%減、「介護職員との関係」が13.3%減、「コミュニケーション」が10.1%減等、A調査に比べてB調査の%ポイントがいずれも低下していた。

実習効果を低下させないためにも、特に「初めての実習」における学生の不安感が過度にならないように介入する必要がある。その際は、①学生が能動的に学ぶ環境設定、②実習で見聞きする視点の拡大、③実習場面の再現に基づく想定練習、④学生に応じた個別指導、⑤実習を後押しする企画を介入内容とし、早期からそれらに取り組むことが求められる。

【キーワード】 介護実習 学生 不安感 介護総合演習 介入

1. 背景と目的

介護実習(以下、実習)は、介護福祉士養成校で学ぶ学生(以下、学生)にとって貴重な学びになる等、多くの研究者がその重要性を報告している¹⁾。その半面、実習は、決められた一定期間、未知の環境に自己を適応させながら実習目標・記録に取り組むため、学生にとって強いストレスとなり、それが不安を感じさせる要因にもなっている²⁾。そうした不安感は、学生が次への課題に対して臆病になる等³⁾、実習効果を弱めてしまう場合もある。

一方で、実習回数が増すごとに学生の不安感は低減する傾向にあることも指摘されている⁴⁾。それだけに、「初めての実習」がより重要といえ、初めての实習に向けて、学生の不安感をいかに軽減できるかが重要な課題である。飯盛(2004)も、1つ1つの不安材料を早い段階から解決していくことが効果的な実習を進める上で大切になってくると指摘している⁵⁾。

では、どうすればよいのだろうか。占部(2009)は、学生が十分に事前学習することに加え、教員が学生の不安要因を特定した上で、その不安感の軽減に向けて取り組む必要性を指摘している⁶⁾。

そこで本研究では、初めての实習における学生の不安感の軽減に向けた介護総合演習での教育指針を得るため、次の3点の目的を設定した。

すなわち、第1に実習1か月前に学生が抱く不安感の内容を把握すること、第2にその結果に基づいて行った「介護総合演習での5つの工夫とその実践」を紹介すること、第3に「その工夫と実践」を実習前の「介入」とした場合、その介入結果を評価し、今後の授業に活かすことである。

2. 方法

1) 先行研究の検討

先行研究をみると、実習後(横山2008)⁷⁾、実習前後(占部・村岡・森永ほか2012)⁸⁾、実習前中(宮城・鈴木2000)⁹⁾、実習前中後(小野・権・根来2008)¹⁰⁾、卒業前(森山・李代2006)¹¹⁾に学生の不安感について調査したものはある。

しかし、初めての实習1か月前→介入→実習前日という過程で調査したものは、筆者らが確認した範囲ではみられなかった。

2) 調査の対象と方法

本研究では、本学介護福祉学科1年81人(女51人, 男30人, 平均21.2歳±7.2)を対象に, A調査は初めての実習(2013年6月19~21日・24~26日)1か月前の5月15日に, B調査は介入後で実習前日となる6月18日に自記式質問票調査を行った。

A調査を「実習1か月前」とした理由は, 介護総合演習の進捗との関係がある。例年4~5月上旬は, 2年間の実習概要の説明や実習先の調整と決定, 実習申込書作成等に時間を費やす。そのため, 実習に向けての本格的な取り組みの開始が結果的に「実習1か月前」になってくる。

調査では, 表1に示した「利用者の理解」等の知識, 「食事介助」等の技術, 「介護職員との関係」等の対人関係, 「言葉づかい」等の態度等からなる計20の実習関連項目について, 「不安でない」(1点) - 「あまり不安でない」(2点) - 「少し不安」(3点) - 「非常に不安」(4点)の4段階の選択肢を用意した。実習関連20項目については, 先行研究を参考にするとともに, 初めての实習前までに授業で学ぶ内容と照らし合わせて検討した。

なお, 「技術全般」とは, 技術のなかにある「技術全般」を除く「コミュニケーション」から「ベッドでの移動・移乗介助」までの全体的な内容を意味する。

表1 実習関連20項目(調査項目)

知 識	利用者の理解, 介護職員の理解, 実習施設の理解
技 術	コミュニケーション, ベッドメイキング, 食事介助, 車椅子移動介助, ベッドでの移動・移乗介助, 技術全般
対人関係	利用者との関係, 介護職員との関係, 実習生同士の関係, 教員との関係
態 度	言葉づかい, 身だしなみ, 遅刻・欠席, 体調管理, 記録等の提出期限
全 体	記録作成, 全体的な不安

質問項目は, ①森山・空代:介護福祉実習における学生の不安の変化. 白梅学園短期大学教育・福祉研究センター年報, 11:68(2006)と②横山:介護実習における学生の不安に関する因子分析的研究. 中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要, 9:127(2008)を参考にしつつも, 本学の授業内容・進捗に沿って独自に検討した。

3) 本研究の分析方法

調査の結果, 有効回収数(率)は, A調査でn=81(100%), B調査でn=77(95.1%)だった。

本研究では, これらのデータに基づき, 各実習関連項目における「不安」の割合を算出した。その上で, 介入する内容については, 過度の不安感が学習意欲だけでなく, 自己に対する自信も低下させるとの指摘があることから¹²⁾, A調査の結果で「非常に不安」の割合が高かった項目を中心に分析することにした。

4) 倫理的配慮

倫理的配慮として, 調査開始前に質問票の提出が単位取得に関係なく, 授業に生かすために研究・発表等に用いることを説明し, 同意を得られた学生から回答を得た。

4. 結果

1) 初めての実習1か月前調査—A調査の結果

図1に, 実習関連20項目における「非常に不安」の割合を示した。初めての実習1か月前の段階で, すでに「非常に不安」と学生が思う割合が最も高いのは「記録作成」の42.0%だった。次いで「ベッドでの移動・移乗」が40.7%で, 「記録作成」と

ともに4割を超えていた。以下, 「利用者との関係」「技術全般」「車椅子移動介助」「コミュニケーション」がいずれも29.6%, 「食事介助」が25.9%, 「全体的な不安」が24.7%, 「実習施設の理解」が22.2%, 「介護職員との関係」「利用者の理解」がともに19.8%と続いた。

2) A調査に基づく介護総合演習での5つの工夫とその実践(介入)

図2に示すとおり, 学生が「非常に不安」と思う割合が高かった項目を中心にしつつ, 他科目との関係を考慮し, 全20項目中11項目に着目した。具体的には, 「記録作成」「利用者との関係」「コミュニケーション」「食事介助」「実習施設の理解」「介護職員との関係」「利用者の理解」「介護職員の理解」「実習生同士の関係」「言葉づかい」「身だしなみ」を選び, それらを中心にして介護総合演習での介入を試みることにした。

なお, 「非常に不安」の上位2位だった「ベッドでの移動・移乗」については, 介護総合演習のなかでは取り扱うことが難しく, 移動の生活支援Iで実際に学生が学んでいたため, 介護総合演習での介入項目からは外すことにした。また, 「身だしなみ」は「非常に不安」と思う学生が0.0%であったもの

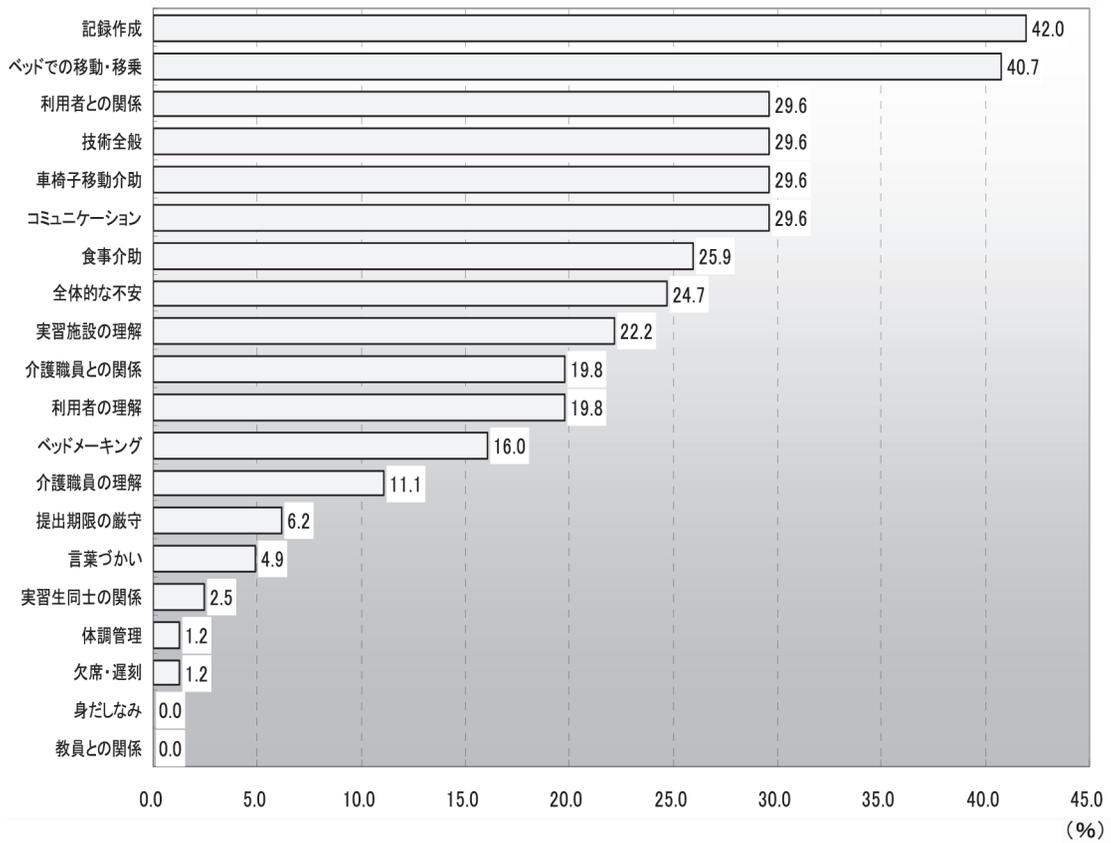


図1 実習関連項目別「初めての实習1か月前」における「非常に不安」と思う割合

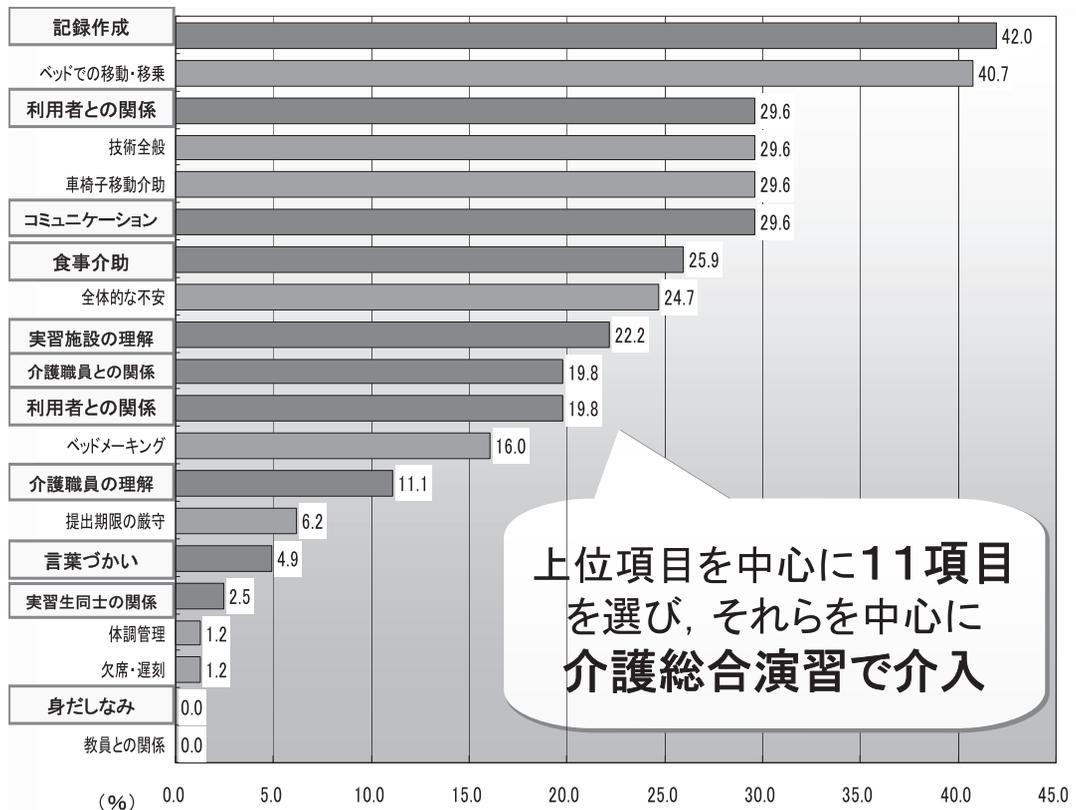


図2 介護総合演習における介入で注目した11項目

の、過去に「身だしなみ」のことで実習中に注意される学生がいたことから、本学としてしっかりと指導する必要があると考え、あえて介入項目に入れることにした。

図3に示すとおり、介護総合演習での介入内容は、(1)「DVDとインターネット等を活用しての事前学習」、(2)「実習中に見聞きすべき視点に関するグ

ループワーク」、(3)「ロールプレイングによる記録作成の想定練習」、(4)「言葉づかいと身だしなみの確認」、(5)「実習出発式の開催」である。以下、これら「5つの介入」について行った順に紹介していく。

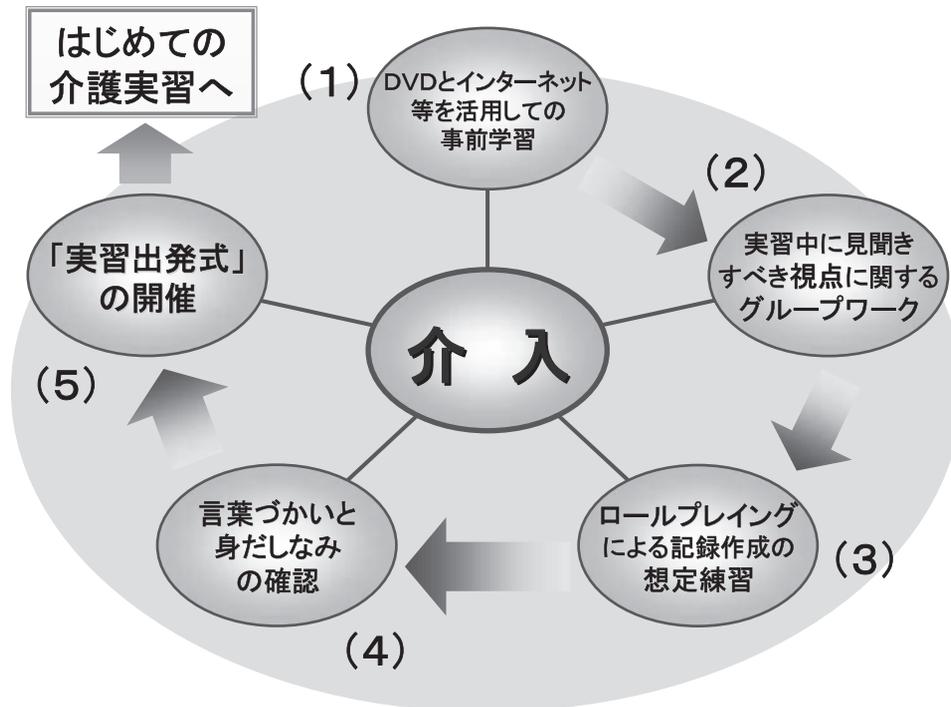


図3 介護総合演習での5つの介入とその過程

(1) DVDとインターネット等を活用しての事前学習

実習施設・事業所、利用者、介護職員のイメージを把握するため、DVDで実習施設である通所介護や認知症対応型共同生活介護（認知症グループホーム）等を見た。ただし、それだけでは受動的な学習にとどまる可能性があった。そこで、それを防ぐために、実際に行く実習先を学生がそれぞれインターネット等を活用して調べ、その情報を速やかに「施設概要記録」に記入した。

教員は、学生が記入した内容を確認し、不十分だった場合には、個別指導した。なお、介護総合演習のなかで内容が分からなくて記載できなかった箇所については、実際に実習先で見聞きして記入することになる。

(2) 実習中に見聞きすべき視点に関するグループワーク

食事、身だしなみ、余暇活動といった生活環境別にグループ編成した。各グループは5～6人程度とした。理由は、グループは4～5人程度が妥当で生産性も高いが、成員が多くなるにつれてストレスが

大きくなり、生産性も低くなるからである¹³⁾。また、学生個々の状況を踏まえることも協調学習の効果に関係するため¹⁴⁾、学生の希望も尊重してグループ編成した。その上で、実習中、そこで何を見聞きすべきかについて、各グループ内で話し合った。

その際は、気軽に意見を出し合える雰囲気大切にするため、ブレインストーミング(brainstorming)を基本とした。ブレインストーミングとは、質より量を重視し、互いの意見に批判をせず、自由奔放に意見を出し合うことである¹⁵⁾。

その結果、食事であれば「利用者様によって食事形態が違うのはなぜか」「嚥下困難な利用者様への食事形態が違うのはなぜか」等が出された。そして、グループ毎、話し合いで出された見聞きすべき視点を黒板に書き、全体の場で発表して共有を図った。その際、学生は、自分たちのグループでは出なかった視点も含めて黒板に書かれた計約80の見聞きすべき視点をすべて「生活環境観察シート」に書き写した。実際に実習に行き、何を見聞きすべきか迷った場合、学生は、この「シート」を頼ればよいことになる。

(3) ロールプレイングによる記録作成の想定練習

記録の目的・書き方の説明後、教員3人が利用者役、実習生役、介護福祉士役に分かれて、よくありがちな実習場面のロールプレイングを行った。

具体的には、「実習生が介護福祉士から紹介された利用者とコミュニケーションする場面」と「実習生が立位のまま利用者に食事介助してしまい、介護福祉士から注意を受ける場面」のロールプレイングを行った。学生は、それらの様子を見聞きして、それぞれ記録を作成した。代表して3人の学生が書いた記録を発表し、教員が全体の場でアドバイスした。

その後、全員の記録を回収して教員が確認し、内容が不十分だった学生には個別指導した。そして後日、参考となる記録を全員に配布し、学生たちは自らの記録と比較して修正を図った。

(4) 言葉づかいと身だしなみの確認

実習初日を想定して、教員が施設長役と実習指導者役になり、実際に実習に臨む時の身だしなみをした学生が挨拶するというロールプレイングを行った。その際、学生は実習メンバーごとにそろって挨拶した。「礼の仕方が雑だった」「元気で挨拶できなかった」場合には、丁寧に指導した。その際、実習着の裾の長さ、髪型、爪等も確認した。

例えば、爪が長すぎた学生には、利用者や自分に与える影響も含めて丁寧に説明し、その場で切るよう個別指導した。

(5) 「実習出発式」の開催

実習前日の2013年6月18日に本学では初めてとなる「実習出発式」を行った。学長・学科長の挨拶に続き、学生代表が「初心を忘れず謙虚な態度で実

習に取り組む」「利用者様やご家族様に信頼される介護福祉士を目指す」と宣誓した。

卒業生代表として介護福祉学科同窓会長からは「松本短期大学介護福祉学科」名入り3色ボールペンが贈呈され、「実習での学びをきちんと記録するように」「学校での学びをぜひ実習で活かして」等、熱いエールが送られた。

3) 介入後の実習前日調査—B調査の結果

B調査(介入後の実習前日)における「非常に不安」の割合を求めた上で、介入した内容についてA調査のそれと比較した。図4は、その結果を示したものである。それによると、「実習施設の理解」が2.6%、「利用者との関係」が11.7%、「介護職員との関係」が6.5%、「コミュニケーション」が19.5%で、A調査と比べてそれぞれ19.6%減、17.9%減、13.3%減、10.1%減であった。つまり、これらの項目については10%ポイント以上も低下していたことが明らかになった。

さらに「介護職員の理解」は2.6%、「利用者の理解」は11.7%、「食事介助」は18.2%となり、やはりA調査に比べてそれぞれ8.5%減、8.1%減、7.7%減という結果であった。また、「言葉づかい」は0.0%で4.9%減、「記録作成」は37.7%で4.3%減というように、介入項目によっても異なるが、「身だしなみ」を除き、A調査に比べ、介入後のB調査の%ポイントが低くなっていた。

ちなみに、非介入9項目におけるA—B調査間の不安低下率の平均が4.8%にとどまったのに対し、介入11項目の不安低下率は非介入項目の2倍弱にあたる8.8%であった。

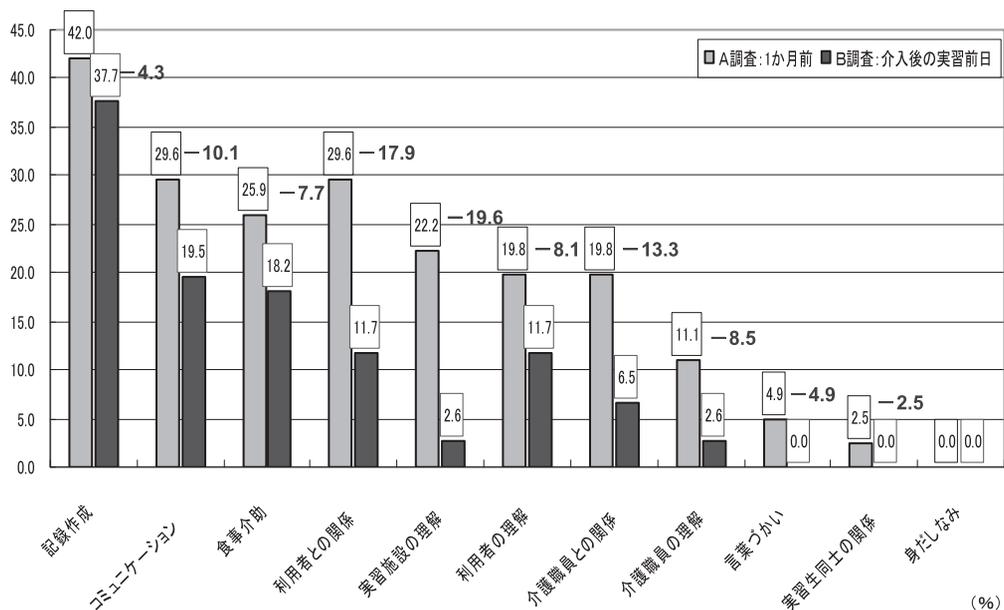


図4 A調査(実習1か月前)とB調査(実習前日)における「非常に不安」の割合比較

4. 考察

1) 介護総合演習での「5つの介入」理由とその重要性

「介護総合演習」における従前の実習前教育を振り返ると、次の5点がいえる。①学生の人数や組み合わせを考慮しないままグループワークを行っていた。②実習場面のロールプレイングは行っていたが、必ずしも学生の不安感に基づいた場面設定でなかった。③身だしなみ等の指導は実習要項の読み合わせによる注意喚起が中心になっていた。④記録作成等で個別指導の必要な学生が増えてきた。⑤全員で実習に臨むという意識の醸成作りが不十分だった。

こうした反省点もあったため、介護総合演習での「5つの介入」を意識的に行う必要があった。具体的には、介入において(1)学生が能動的に学ぶ環境設定、(2)実習で見聞きする視点の拡大、(3)実習場面の再現に基づく想定練習、(4)学生に応じた個別指導、(5)実習を後押しする企画を意識した。以下、それらの重要性について理由も含めて考察する。

(1) 学生が能動的に学ぶ環境設定

確かに文献学習も重要である。しかし、学習目的に応じて何を素材にして学ぶかは、変化するものといえる。ここでの学習目的は、学生自らが実習施設・事業所のことを知り、「何も知らない」ことから生じる不安感を軽減することにあった。そのため、実習施設・事業所の情報を学生自らの力でどれだけ入手できるかが問われることになる。それだけに、パソコンを用いた点は有効だったと思われる。

現在では、小学校の時から授業でパソコンを取り入れている。視覚的にもわかりやすく、効率的に必要な情報を探し出すことができる。多くの学生にとって馴染みのある情報源を活用し、収集した情報を速やかに記載したことで、早い段階から実習施設・事業所のことを知る機会になったと思われる。

(2) 実習で見聞きする視点の拡大

授業では、「生活環境観察シート」の作成のみを目的としていない。むしろ、その前段階として、実習する際、そこで何を見て、何を質問するかといった点に力を入れた。なぜなら、実習中に何を見聞きすればよいのか、学生自身が「困らない」ことを目指したからである。

また、学生によっては、一緒に実習に行く実習メンバーと協力せず、自らの力だけで何とかしようと考え、結果的に悩んでしまったケースもみられる。それだけに、実習前の段階から、他の学生との対話による相互作用を大切にしていける必要があると思われる。その意味では、より多くの学生の視点を反映

させるために仕掛けたグループ編成への配慮やブレインストーミングの活用は有効だったと考えられる。

(3) 実習場面の再現に基づく想定練習

ロールプレイングを行うことで、実習場面の「見える化」につながる。平野(2009)は、「見える化」が気づき→思考→対話→行動という連鎖をもたらすと指摘しており¹⁶⁾、学生にとっては記録作成の想定練習につながったと思われる。つまり、学生がロールプレイングを見聞きして気づき、そこから考え、試行錯誤しながら、それらを紙面に書き、さらに書いた内容を見て気づいた点を修正していくという一連の過程が展開されやすくなったといえる。

さらに、ロールプレイングによる学生の不安に基づいた実習場面の再現は、学生の不安軽減策には実習への可能な限りのイメージ化が必要という森山・空代(2006)の指摘¹⁷⁾をより支持する結果になったと思われる。

(4) 学生に応じた個別指導

「施設概要記録」「生活環境観察シート」等の記録では、学生によって内容が不十分になってしまう人もいる。そしてそうした学生は、「苦手意識」を持ったまま実習を迎えてしまう場合もある。そこで、そうした学生を見逃さないためにも、教員が全学生の記録を事前に回収し、確認することは重要といえる。その上で、記録が不十分だった学生に対して個別指導し、その学生の苦手意識を軽減できるよう働きかけていくことが必要である。

ただし、個別対応する分、教員の負担も増すため、教員同士の連携強化がより求められる。

(5) 実習を後押しする企画

実習出発式において、実際に介護福祉士として働き、しかも実習施設の指導者として活躍されている卒業生から、実習前日にエールを送られたことは、1年生にとって気持ちが引き締まったとともに、率直に嬉しかったと思われる。特に「松本短期大学介護福祉学科」の名入りボールペンを卒業生から1人ひとりがいただけたことは、実習記録作成に向けての励みにつながったと考えられる。

柘崎(2009)も、実習指導関係を構成する3者システムとして実習生、教員、実習施設の実習指導者をあげ、この3者のあり様が実習内容や実習成果に与える影響が大きいと指摘している¹⁸⁾。また、本学介護福祉学科の卒業生が母校に来て行った職場別相談セミナーの結果をみても、「卒業生に自分が聞きたいことが聞けたので、不安要素が少し減った」

「卒業生のお話を聞いて少し不安が解消した」等の感想が在学生から聞かれている¹⁹⁾。

それだけに、実習出発式以外にも、介護福祉士で実習指導を担当している卒業生が介護総合演習の授業に参画できる機会を今後も増やしていく必要がある。いずれにしても、教員に加え、将来のモデルとなる卒業生の参画が学生にとって心強い支えになることは間違いない。

2) 先行研究とは異なる結果になった要因

A調査からは、学生は実習1か月前から不安感が強い傾向が示唆された。「移動・移乗」「食事介助」等の技術以外にも、「記録作成」「実習施設の理解」「利用者との関係」「介護職員との関係」にその傾向が強かった。しかし、実習前日のB調査の結果からは、A調査の不安感が「身だしなみ」を除き、すべての項目で軽減されたことが示唆された。特に「実習施設の理解」「利用者との関係」「介護職員との関係」といった内容を中心にA-B調査間の不安低下率が高かった。不安軽減が図れた理由としては、介護総合演習以外の他科目の影響や学生自身の生活上の出来事といった他の要因も確かに考えられる。

その一方で、先行研究では、本調査結果とは異なる結果が示されている。例えば、学生の不安感がすべての実習において実習前に高くなるという結果や²⁰⁾、初めての实習前では実習に対する不安感や緊張感を強く感じたという結果である²¹⁾。さらに、利用者とのコミュニケーションについて「最も不安がある」と回答した学生が実習前で81.9%だったのに対し、実習後に79.1%に減ったという調査結果もみられる²²⁾。つまり、先行研究の多くは、時期を問わず、実習前の学生の不安が高いことを示していることになる。

にもかかわらず、本調査結果は、それら先行研究の結果とは異なった。しかも、1年生の初めての实習前日でも不安軽減が図れる内容もあることが示唆されたのである。では、この理由をどのように説明したらよいのであろうか。果たして他科目の影響や学生自身の生活上の出来事といった他の要因だけで片付けてしまってもよいのであろうか。なぜなら、前述した先行研究は、いずれも、学校の特色や地域性の違いはあるにしても、同じ介護福祉士養成校で介護福祉士を目指す学生であることには変わらないからである。ただ、異なる点をあげるとすれば、先行研究では実習に対する学生の不安を事前に把握した上で、それに基づいた授業内容・方法の工夫と実践を行わず、実習前に調査を行っていたという点になる。

また、非介入項目よりも介入項目のほうが平均し

てA-B調査間の不安低下率が高かったという結果も踏まえて考えるならば、他科目の影響といった他の要因に加え、介護総合演習での「5つの介入」も本調査結果に関係したと思われる。

3) 実習との組み合わせで意図的に介入する意義

介護総合演習は、「介護福祉士養成カリキュラムにおける教育内容のねらい」にも明記してあるように、実習と組み合わせで学習する必要がある。したがって、今回のように、実習前の段階から学生が実習で抱く不安内容を意図的に把握し、その結果に基づいて意識的に授業内容・方法の工夫を行えたことは、「教育内容のねらい」に即することができたといえる。

確かに、介護総合演習での「5つの介入」が学生の実習に対する不安軽減とどのように関連し、どのような作用を及ぼしたかについては明らかにできなかった。

しかし、介入後、結果として、学生が抱く実習への不安が、単純集計で10%ポイント以上も軽減した項目があったという事実にも目を向ける必要がある。しかも、その不安は、ただの「不安」ではない。前述のとおり、本研究では、実習に好ましくないとされる「非常に不安」と思った内容を中心に分析しており、それらが軽減した意味は大きい。柘崎(2009)も、介護総合演習と実習の両教育内容は「組み合わせでの学習とする」ことで、より効果的な学習成果が期待されると明記しており²³⁾、実習との組み合わせで介護総合演習における授業内容・方法を工夫して意図的に介入する意義を再認識できた。

5. 結論

本研究をまとめると、次の3点に集約できる。第1に、実習効果を低下させないためにも、特に「初めての実習」における学生の不安感が過度にならないように介入する必要がある。第2に、過度の不安感軽減に向けては、学生の不安感を把握した上で、それに基づいた介護総合演習での授業内容・方法の工夫を行い、実習開始前の早期から意図的に介入していくことが求められる。第3に、そうした早期介入を行えば、初めての实習前日であっても、内容によっては学生の過度の不安感を低下させる可能性もあることが示唆された。

今後の課題は2点ある。第1に、本研究では、厳密な介入効果の検証を行えなかった。具体的には、介護総合演習以外の科目や学生自身の生活といった他の要因も含めての精査が必要であったと思われる。第2に、実習における学生の不安感軽減に向けた取り組み事例を今後さらに蓄積しつつ、実習前だ

けでなく実習中・後も含めて、実習における学生の不安感軽減に有効な教育内容・方法を総合的に検討していくことが求められる。その際は、実習施設・事業所と協力していくことも忘れてはならない。

謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただいた学生の皆様をはじめ、関係者の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 古川和稔：介護実習における学生と施設職員との関係形成プロセス。介護福祉学, 15 (1) : 81 (2008).
- 2) 柗崎京子・田中秀明・中野いずみほか：介護実習における学生の不安 (3) —介護実習不安尺度の因子構造と2年間の時系列変化。共栄学園短期大学研究紀要, 19 : 98 (2003).
- 3) 飯盛茂子：名古屋柳城短期大学における介護福祉実習のあゆみと課題。名古屋柳城短期大学研究紀要, 26:131 (2004).
- 4) 前掲 2) 107.
- 5) 前掲 3) 131.
- 6) 占部尊士：介護福祉実習における学生の意識変化に関する研究—第I段階介護福祉実習前後での検討。介護福祉学, 16 (2) : 227 (2009).
- 7) 横山さつき：介護実習における学生の不安に関する因子分析的研究。中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要, 9 : 125-133 (2008).
- 8) 占部尊士・村岡剛子・森永佳江ほか：介護福祉実習における実習生への心理的变化に関する研究。長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要, 10 (1) : 71-77 (2012).
- 9) 宮堀真澄・鈴木圭子：介護福祉実習における学生の不安の実態—介護福祉実習Ⅱにおける学生の不安の変化。介護福祉学, 7 (1) : 117-124 (2000).
- 10) 小野隆・権珠・根来民子ほか：介護福祉士養成短期大学生に対する介護実習前・中・後におけるSTAIによる不安の変化。清光学園岡崎女子短期大学学術教育総合研究所報, 1 : 35-38 (2008).
- 11) 森山千賀子・李代直美：介護福祉実習における学生の不安の変化—介護福祉士養成課程学生へのアンケート調査からの考察。白梅学園短期大学教育・福祉研究センター年報, 11 : 56-70 (2006).
- 12) 横山さつき：介護実習における学生の不安の軽減に関する一考察。介護福祉教育, 15 (2) : 30 (2010).
- 13) 鷹野和美：チームケア論—医療と福祉の統合サービスを目指して。ぱる出版, 71-72 (2008).
- 14) 武田啓子：生活支援技術のアセスメント力を育む授業。介護福祉学, 19 (1) : 87 (2012).
- 15) 古川孝順・白澤政和・川村佐和子：社会福祉士／介護福祉士のための用語辞典。誠信書房, 483 (2006).
- 16) 平野隆之：地域福祉推進の理論と方法。有斐閣, 9 (2008).
- 17) 前掲 11) 69.
- 18) 柗崎京子：「介護総合演習」「介護実習」のねらいと展開。介護総合演習—実習をととした学びの目標と課題。建帛社, 28 (2009).
- 19) 福田明・小坂みづほ・尾台安子ほか：「卒業生と在生学生による職場別相談セミナー」の取り組み状況と成果に関する検討—3回目の取り組みから得られた内容検討を中心に。松本短期大学研究紀要, 第22号 : 66 (2013).
- 20) 前掲 8) 75.
- 21) 武藤久枝・平松夕奈：介護実習の早期実施に関する有効性の検討。岡崎女子短期大学研究紀要, 15 (2003).
- 22) 金津春江：第一段階実習における指導教員の役割—学生の教員に対する要望という視点から。大阪体育大学短期大学部紀要, 第6号 : 20 (2005).
- 23) 前掲 18) 20.